

2011 **夏** 孟子

わんぱくクラブ **里山** 学校

活動報告書

～里山は君たちのセンスオブワンダーを待っている～

2011年8月7日・8日



主催：海南市わんぱく公園

協力：NPO法人自然回復を試みる会ビオトープ孟子

はじめに

保護者各位

拝啓 季夏の候、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。この度は私ども海南市わんぱく公園主催の里山学校に多数ご参加いただき誠にありがとうございました。天候にも恵まれ、おかげさまで無事に開催することが出来ました。

親元を離れ里山学校での宿泊体験や集団生活をした経験は、子どもたちにとって将来大きな財産や自信になることと願ってやみません。また、私たち大人も子どもたちの無邪気な笑顔を見る度に、あらためて子どものセンスオブワンダーに感銘いたしました。

子どもたちとの過ごした2日間、私たちにとっても本当に子どもの目線で「遊び」と「学び」を原点回歸することが出来ました。今後もさらに子どもたちへの遊びと教育を充実させていきたいと考えています。末筆ではございますが今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

敬具

海南市わんぱく公園

北原 敏秀

参加者名（略名前）

- | | |
|-------|-------|
| 1、宗 | 14、松村 |
| 2、田中 | 15、入江 |
| 3、前田 | 16、大迫 |
| 4、中谷 | 17、柏木 |
| 5、窪田 | 18、宮崎 |
| 6、脇浜 | 19、吉田 |
| 7、脇浜 | 20、瀬戸 |
| 8、山根 | 21、大和 |
| 9、大堀 | 22、菱井 |
| 10、大堀 | 23、菱井 |
| 11、西浦 | 24、永石 |
| 12、西浦 | |
| 13、松村 | |

運営関係者名

- 1、北原 敏秀（わんぱく公園）
- 2、北原実恵子（わんぱく公園）
- 3、丸嶋 康行（ビオトープ孟子）
- 4、有 本 智（わんぱく公園）
- 5、木原 正晶（ビオトープ孟子）
- 6、住野 琇明（ビオトープ孟子）
- 7、偉士大郁子（わんぱく公園）
- 8、山本 昌寛（わんぱく公園）
- 9、嶋 田 實（わんぱく公園）
- 10、芝 正 純（わんぱく公園）
- 11、高橋 久富（ビオトープ孟子）
- 12、仲里 長浩（ビオトープ孟子）

カリキュラム

<8月7日(日)>

- 10:30 受付
11:00 開会式
12:00 昼食
13:00 自然観察会(雑木林散策・動植物採集) 担当 有本
15:00 ペットボトルトラップ仕掛け 担当 仲里
16:00 自由時間(プール・散策)
17:00 夕食準備
17:30 夕食
19:00 環境レクチャー(おしえてビオトープ) 担当 高橋久富
19:30 森の夜の映画会(ドラえもん 緑の巨人) //



<8月8日(月)>

- 07:00 起床
07:20 ラジオ体操 担当 高橋久富
08:00 朝食
09:00 ペットボトルトラップ回収 担当 仲里
10:00 スケッチ
10:30 自由時間(プール・散策)
11:30 片付け・清掃
12:00 閉会式・解散



<学習内容>

●自然観察会

担当/有本 場所/トンボ池・水路・水田

内容/孟子不動谷トンボ池や水田、雑木林における動植物の観察と採集。

●ペットボトルトラップ

担当/仲里 場所/水路

内容/ペットボトルで作ったトラップ(捕獲筒)で溝川に仕掛けをし、侵入生物を調査する。

●環境レクチャー

担当/高橋久富 場所/やまかがし資料館前

内容/ビオトープについての概念から、自然のまもり方や生きものの世界、つながりを考える。そして自分たちの生活と照らし合わせて生きものとの共生を考える。(パワーポイント使用)

●森の夜の映画会

担当/高橋久富 場所/やまかがし資料館前

ドラエモンDVD「緑の巨人」から植物などの自然について考える。

子どもたちへのメッセージ

レイチェル・ルイズ・カーソン (Rachel Louise Carson, 1907年5月27日 - 1964年4月14日 アメリカ合衆国のペンシルベニア州に生まれ、1960年代に環境問題を告発した生物学者。) は著書「センスオブワンダー」の文中で次のように執筆しています。

「寝る時間がおそくなるからとか、服がぬれて着替えをしなければならないからとか、じゅうたんを泥んこにするからといった理由で、ふつうの親たちが子どもから取り上げてしまう楽しみを、わたしたち家族はみなロジャーにゆるしていました。ともに分かち合っていました。

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になる前に澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない<センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目をみはる感性>を授けてほしいとたのむでしょう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる怠慢と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。もし、あなた自身は自然への知識をほんのすこししかもっていないと感じていたとしても、親として、たくさんの子どものことを子どもにしてやることができます。

たとえば、こどもといっしょに空を見あげてみましょう。そこには夜明けや黄昏の美しさがあり、流れる雲、夜空にまたたく星があります。「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちがである事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。

人間を超えた存在を意識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐくみ強めていくことは、どのような意義があるのでしょうか。自然界を探検することは、貴重な子ども時代をすこす愉快で楽しい方法のひとつにすぎないのでしょうか。それとも、もっと深いなにかがあるのでしょうか。わたしはそのなかに、永続的で意義深いなにかがあると信じています。」 ～レイチェル・カーソン 「センスオブワンダー」より～

子どもたちが私たち大人や子どもどうしの共同生活を通して得られる経験。空き地にはいない里山の生きもの、水道とは違う冷たい川の水、アスファルトとは違うふかふかの山道、町の夜空では見ることのできない美しい星と月、聞こえてくる音は車のエンジン音ではなく風の音と鳥や虫のさえずりなど直接子どもたちに作用する体感。

私たちがこの里山学校を開催する趣意は、この経験と体感が子ども期に大切な「感性」を育むことに寄与できれば幸いと考えていることです。異日常から日常に戻っても、里山学校で経験した「水の冷たさ」「きれいな夜空」「生きものの声」、そして私たちスタッフのことも思い出して下さい。また来年みんな元気で会える日を楽しみにしています。

里山学校スタッフ一同